

◇巻頭言◇

『都市文化研究』20号を記念して

佐 賀 朝
(都市文化研究センター 所長)

都市文化研究センター(UCRC)は、21世紀COEプログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」(2002～06年度)の採択を受けた文学研究科が、同プログラムを推進する研究・教育拠点として2003年に設立したものである。設立以来、多様な国際共同研究と学際的な研究・教育の交流拠点として機能し、人文・社会科学の諸分野に及ぶ形で、都市と文化に関する多彩な研究成果を挙げてきた。

「都市文化」というキーワードは、2007年に「グローバルCOEプログラム」に採択された本学「都市研究プラザ」の課題「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」にも継承され、さらに発展した。また、21世紀COEの教育部門の中核だったインターナショナルスクールも、2007～2009年度に文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」に採択され、現在に至るまで、若手研究者の国際的な研究発信力の育成に貢献してきた。

これらは、大都市大阪が抱える課題と正面から切り結びつつ、歴史と文化に関する多彩な学問分野の成果を蓄積し、それを市民や地域社会、あるいは国際的に発信するものであった。

さて、UCRCが機関研究雑誌として発行してきた本誌「都市文化研究」の10号以来の歩みを振り返ると、このかんもUCRCが都市と文化に関わる多彩な国際的で学際的な共同研究を蓄積し、また、そうした交流を通じて文学研究科やその周辺に集う若手研究者の成果発信の場として機能してきたことが分かる。科研など学内外の競争的資金にもとづく共同研究や、二つの「頭脳循環プログラム」(「東アジア都市の歴史的形成と文化創造力」(2011～13年度)、「EU域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築」(2012～14年度)と連続で採択)、さらには2015年度からスタートした文学研究科の研究科プロジェクト推進研究にもとづく諸成果が、このかんの誌面に反映されているのが、その具体例と言えよう。

その一方で、大型プログラムの終焉に伴い、豊富な資金を基に学際的研究を進め、大がかりなシンポジウムを開催し、その成果を反映させるようなスタイルが減るなか、文学研究科やそこに集う研究者が目ざすべき方向性が見えにくくなり、新たな道を模索する動きも生じてきた。本誌17号に掲載された文学部創設60周年記念シンポジウム特集「市大文学部と「都市文化研究」再考」もその一つであろう。

現在、大阪市立大学と文学研究科、そしてUCRCは、大きな曲がり角に直面している。文学研究科とUCRCについて言えば、世界に発信しうる人文科学の研究成果を創造し続け、研究を軸とした市民の研究・教育機関として生き残れるか——その分かれ道に立っていると見えよう。

大阪市立大学は、1920～30年代当時、全国随一の水準で都市政策を推進した大阪市政のもとで、地域の市民が、都市科学に裏付けられた質の高い教育・文化を享受し、また都市の経済・社会を支える有為な若者を育てるための場として設立された。こうした伝統を絶やすことなく、地に足の着いた基礎的人文科学を着実に成長させながら、同時にこれまでの真に学問的と言いつける蓄積を再評価し、それらを基盤に、新たな国際共同研究や、内実のある研究成果の国際的発信、市民社会への提供が求められる。例えば、2017年度に採択された新しい頭脳循環プログラム「周縁的社会集団と近代」(2017～19年度)は、これまで日本近世社会史研究が蓄積してきた方法を、海外のアジア史研究にも発信すべき価値あるものと捉え、双方向的な国際共同研究を模索するものである。

私たちは都市文化研究20号を機に、自分たちの内実ある研究蓄積を見直し、それを糧に、将来を模索する中から、次の10年を展望したい。

引き続き、文学研究科やその周辺に集う多くの研究者が共同を広げ、都市と文化をめぐる新たな知的創造の場であり続けられるよう、多くの皆さんの参加とご支援をお願いしたい。